

— 紡いだ歴史を未来へつなぐ

かつて、昭和の時代、街頭で子どもたちを沸き立たせた紙芝居——。その紙芝居が、今、ふたたび脚光を浴びています。折しも、宮城県図書館が所蔵する街頭紙芝居等5,652点が、平成18年(2006)3月に国の登録文化財となりました。今回の特集では、紙芝居の歴史をたどり、今に生きる魅力を探ります。

『黄金バット』や活劇『少年イーグル』などが、まだ焼け跡の残る街角で上演されるようになり、子どもだけでなく大人まで紙芝居屋が来るのを楽しみにしたのです。昭和20年代前半が戦後の街頭紙芝居の隆盛期といわれています。

ところが、高度経済成長期に向かう昭和30年前後から、街頭紙芝居は急激な衰退期を迎えます。大きな原因は、昭和28年(1953)にテレビ放送が開始されたことでした。「電気紙芝居」とも称されたテレビの人気は爆発的に広まり、紙芝居はテレビに圧倒されてしまったのです。また進学ブームにより、街頭紙芝居のお客であった子どもたちが多忙になったこともあり。紙芝居屋が次々と廃業し、演じ手を失った紙芝居は廃棄、散逸を余儀なくされました。大正から昭和にかけて発展した街頭紙芝居でしたが、時代の変化に飲まれ、大衆文化の表舞台から撤退することになりました。

みやぎ最後の紙芝居屋・井上氏と宮城県図書館のコレクション

街頭紙芝居の隆盛期、仙台市内にも120人ほどの紙芝居屋がいたといえます。テレビの普及により紙芝居屋の廃業が相次ぎ、最後に残ったのが井上藤吉氏(2007年1月に逝去、83歳、右写真=佐々木隆二氏撮影)でした。井上氏は30年以上も現役の紙芝居屋として自転車などで各地を巡り、廃業した後もイベントに出演するなど紙芝居の楽しさを伝え続けました。

宮城県図書館の紙芝居コレクションは、その井上氏から一括寄贈された5,000点余が中心となっており、文字通り東日本最大級です。その多くは手描きのものであり、街頭で紙芝居が盛んに演じられた時代の精神、大衆文化のあり様、社会的背景を伝える貴重な資料となっています。

宮城県図書館では、これらの紙芝居の保存状態を良好に保つため、一枚一枚の汚れを拭き取り、破損、欠頁の有無などを確認しました。さらに外部から専門家を招いて調査を行い、その結果、平成18年3月に紙芝居資料5,652点(紙芝居5,645点(57,075枚)ほか関係資料を含む)が国の登録有形文化財(美術工芸品)として登録されました。大衆文化、児童文化の歴史を実証する意義と、手描き制作であるが故の資料の価値が認められたものです。

※

紙芝居は誕生から戦争の時代を経て、盛衰を繰り返し、街頭から姿を消したかに見えますが、今日、社会が高度に情報化し、メディアが多種多様化するなかにあっても、様々な場所で活用され、子どもたちからお年寄りまで楽しまれています。聞き手の様子をうかがいながら声の調子を変え、物語を緩急自在に演じる紙芝居は、聞き手と演じ手の心がつながる双方向のメディアであり、人々を物語の世界に引き込むのです。

紙芝居の価値を再発見し、世代を結びつけるために活用していくこと、そして次代へ受け継ぎ保存していくことを図書館では目指しています。

※登録文化財とは、文化財保護法に基づき、国・地方公共団体指定以外の有形文化財、有形民俗文化財及び記念物のうち、保存・活用のための措置が特に必要なものを文部科学大臣が文化財登録原簿に登録して保存を図るもの。

【参考文献】『紙芝居昭和史』 加太こうじ著 岩波書店 2004年
『紙芝居の歴史』 上地ちづ子著 久山社 1997年
『紙芝居 街角のメディア』 山本武利著 吉川弘文館 2000年



紙芝居前夜

—— 紙人形の「紙芝居」がはじまり

紙に描かれた絵を次々に変えながら物語を語っていくというのが、現在の一般的な紙芝居の形態です。その前身には様々な形態で「絵を見せて語る」方法が存在しました。映写機を使って幕に人物や背景などを映し出しながら物語を演じる写し絵や、持ち手のついた紙人形で物語を演じる立絵などです。

写し絵の流れを汲んだ立絵は、紙人形を使って芝居をすることから「紙芝居」と呼ばれるようになりました。さらには紙人形を操るより簡単な方法として、平面に絵物語を描いて演じる手法(平絵)が生まれ、その斬新さが受けてますます主流となり、ここに現在の紙芝居の誕生をみることになるのです。

昭和5年(1930)に東京写絵業組合ができて以来、平絵の形での紙芝居は急速に広まっていきました。代表的なものはなんと言っても街頭で上演される『黄金バット』でしたが、街頭紙芝居が子どもたちの人気をどれだけ集めたかは、当時の子どもたちが街頭紙芝居を一日平均1.5回以上見たというデータがあるほどです。

一方で、子どもたちの絶大な人気を集めた街頭紙芝居のスタイルや画面構成などを取り入れ、聖書物語など伝道を主眼とした紙芝居も作られました。それらは布教や教育のための広範な利用を目指し、手描きの絵ではなく、量産できる印刷紙芝居として作られるようになりました。

街頭紙芝居の隆盛

—— 子どもたちを夢中にさせた『黄金バット』

戦時中は検閲が厳しく、紙芝居においてもそれは例外ではありませんでしたが、武士道や英雄譚など、戦意を高揚させる内容の紙芝居、いわゆる国策紙芝居は国民学校などでしきりに上演されました。しかし、戦禍が激しくなるにつれ、物資の不足や学童疎開などから、紙芝居の上演は激減していきます。

戦争が終わってもまもなく、紙芝居の作り手たちが集結し、昭和21年(1946)には街頭紙芝居が復活しました。戦前から人気を集めていた



昭和末年まで街頭で紙芝居を演じていた紙芝居屋さん・井上藤吉氏(仙台市宮城野区清水沼にて1985年佐々木隆二氏撮影)